日本語を味わう名詩入門 2

金子みすゞ

矢崎節夫・萩原昌好 編

あすなろ書房

こだまでしょうか

「遊ぼう」っていうと
「遊ぼう」っていう。

「馬鹿」っていうと
「馬鹿」っていう。

「もう遊ばない」っていうと
「遊ばない」っていう。

そうして、あとで
さみしくなって、

「ごめんね」っていうと
「ごめんね」っていう。

こだまでしょうか、
いいえ、誰でも。

みんなを好きに

私は好きになりたいな、
何でもかんでもみいんな。

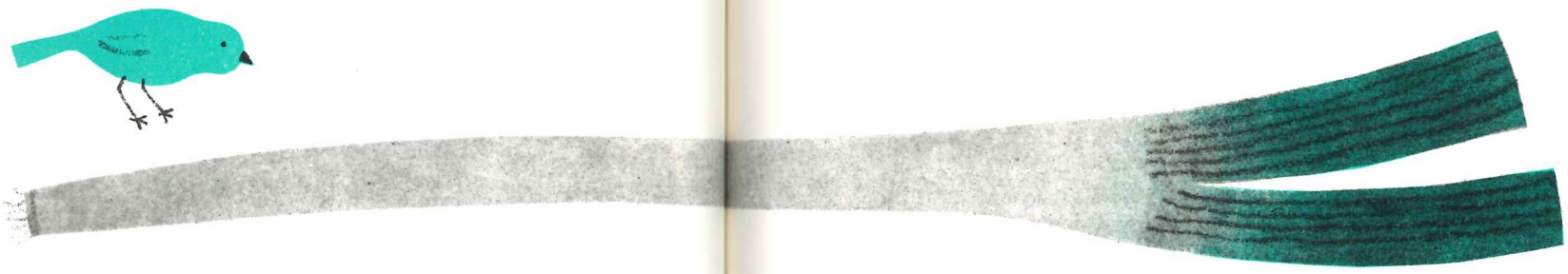
葱も、トマトも、おさかなも、
残らず好きになりたいな。

うちのおかずは、みいんな、
母さまがおつくりなったもの。

私は好きになりたいな、
誰でもかれでもみいんな。

お医者さんでも、烏でも、
残らず好きになりたいな。

世界のものはみィんな、
神さまがおつくりなったもの。



私と小鳥と鈴と

私が両手をひろげても、
お空はちっとも飛べないが、
飛べる小鳥は私のように、
地面を速くは走れない。

私がからだをゆすっても、
きれいな音は出ないけど、
あの鳴る鈴は私のように、
たくさんな唄は知らないよ。

鈴と、小鳥と、それから私、
みんなちがって、みんないい。

日本語を味わう名詩入門

11

サトウハチロー

萩原昌好 編

あすなろ書房

おかあさんの匂い

おかあさんの匂いは　どんな　どんな匂い
——朝はかまどの　けむりの匂い
　昼はおべんとの　おかずの匂い
　晩にはかすかな　おふろの匂い

おかあさんの匂いは　どんな　どんな匂い
——春はうれしい　ちょうじ[*1]の匂い
　秋はやさしい　もくせい[*2]の匂い
　冬はひなたの　ふとんの匂い

おかあさんの匂いは　どんな　どんな匂い
——ひざにだかれりゃ　くず湯の匂い
　おはなしなされば　おも湯の匂い
　うたをうたえば　レモンの匂い

おかあさんの匂いは　どんな　どんな匂い
——ねえさんか　いもうとに　よくにた匂い
　おまどに　いろり[*3]に　ただよう匂い
　わかった　わたしの　おうちの匂い

*1 ちょうじ
丁字。テンニン科の熱帯栽培常緑喬木。初夏に淡紅色の花が咲き、花や果実から香料をとる。

*2 もくせい
木犀。モクセイ科の常緑喬木。秋、香りのよい小さな花が咲く。

*3 いろり
床を切って箱形にし、暖房などの火を燃やす所。

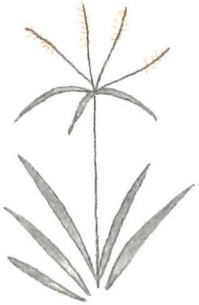
よそ行きの顔はきらい

雑草が好きなんです
よそ行きの顔をしていないからです
とりすましたところがないからです
勝手気ままにしているからです

ひめむかしよもぎ
おーばこ　かやつり草
むらがって　はびこってるはこべ
みんな気にいっているんです

花をつけても　ちいさいちいさい花
それが又性に合うんです
どぶのふちの露草なんか
顔をあわせるたんびに「やァこんちわ」です

雑草が好きなんです
せいいっぱい生きているからです
おもいおもいにのびようとしているからです
それにそれに　何より丈夫だからです



ちいさい秋みつけた

誰(だれ)かさんが　誰(だれ)かさんが　誰(だれ)かさんが　みつけた
ちいさい秋　ちいさい秋　ちいさい秋　みつけた
めかくし鬼(おに)さん　手のなる方へ
すましたお耳に　かすかにしみた
よんでる口笛　もずの声
ちいさい秋　ちいさい秋　ちいさい秋　みつけた

誰(だれ)かさんが　誰(だれ)かさんが　誰(だれ)かさんが　みつけた
ちいさい秋　ちいさい秋　ちいさい秋　みつけた
お部屋(へや)は北向き　くもりのガラス

うつろな目の色　とかしたミルク
わずかなすきから　秋の風
ちいさい秋　ちいさい秋　ちいさい秋　みつけた

誰(だれ)かさんが　誰(だれ)かさんが　誰(だれ)かさんが　みつけた
ちいさい秋　ちいさい秋　ちいさい秋　みつけた
むかしの　むかしの　風見の鳥の
ぼやけたとさかに　はぜの葉ひとつ
はぜの葉あかくて　入日色
ちいさい秋　ちいさい秋　ちいさい秋　みつけた

日本語を味わう名詩入門

18

工藤直子

萩原昌好 編

あすなろ書房

風景

てっぺんに　空

むこうに　明日

麦ばたけを乗せて

地球は　ブランコ

空と大地の間で

これは、工藤さんが子どものころに見た、あるいは感じた「風景」の一つなのでしょうか。読み方によって、さまざまなイメージが広がります。

「麦ばたけを乗せて／地球は　ブランコ」という、飛躍した表現が独特で、いかにも工藤さんらしいと思います。実は自分がブランコに乗っているのですが、こいでいる本人から見ると、目の前の麦畑が上がったり下がったりしてゆれている。そのさまが「地球は　ブランコ」のように見える、ということなのでしょう。これは、まさに子どもの眼でしか感じとれない感覚です。大きく広がる真っ青な空。遠くの地平線まで、えんえんと広がる麦畑。ゆれ動く空と大地の間に、たった独りきりでいる自分。でも、もっともっと力のかぎり、思いっきりブランコをこいだら、もしかしたら、明日を越えて、今まで見たこともない光景が見えるかもしれない。そんなふしぎな高揚感や、まるで丸ごと地球を抱きしめているかのような、わくわくした思いが感じられる詩です。

夕焼け

あしたは　かならず
晴れるに　ちがいないなあ

あしたも　わたしは
たしかに　生きるだろうなあ

あしたこそ
なにかを　みるかなあ

きっと　そうであり
そうに　ちがいなく
そうと　思いたい

……
そんなふうに眺(なが)められる
夕焼けが　あった

かたつむりのゆめ

かたつむりでんきち

あのね　ぼく
ゆめのなかでは、ね
ひかりのように　はやく
はしるんだよ

かたつむりのつぶやき

かたつむりは、陸上の巻貝です。足はなく、体内にふくまれる特殊な粘液の力で、はうように進みます。ほんの短い距離を移動するのに、数時間を要することもしばしばです。そのような生態学的な根拠はさておき、ここでは「かたつむりでんきち」くんのひとりごとです。

でんきちくんは、いつもゆっくりゆっくりのスローペースなのですが、夢の中では、ふだんからあこがれている、「ひかり」のような速力の持ち主に変貌するのです。でも、目がさめると、またいつものゆっくりゆっくり。しかしその分、でんきちくんはいつもいっしょにいる地面とあれこれと話をしたり、石一個や数粒の砂とでも、楽しい時間を過ごせるのではないでしょうか。

夢の中では決して味わえない、そんな楽しみを知っているのは、もしかしたら工藤さん自身なのかもしれませんね。